永遠と不滅性に向き合い、時間性と歴史の中を生きる

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

生存の飢餓と深淵

ドストエフスキーは、『罪と罰』の中で、主人公ラスコーリニコフにこんなことを言わせている。それは、処刑 1 時間前の死刑囚の言葉として、彼ラスコーリニコフが不意に思い出す次のような科白だ。

> もしどこかの山の頂きか、岩の上か、或はただ二本の脚を置くにたるだけの狭い場所に生きなければならぬことになったとしても、―そして、その周囲は深淵で、大洋で、永久の晦冥（かいめい）、永久の孤独、永久の風雨に包まれたような、その尺にもたらぬ面積の上に、一生涯はおろか、千年万年そのままで立っていなければならぬことになっても、今すぐ死ぬよりは、やはり生きているほうがましだと！　ああ、ただ生きたい、生きたい、生きたい！　よしんばどんな生きかたでも、―ただ生きてさえいられればいい！　……なんという真実だろう！ああ、まったくなんという真実だろう！[1]

ここに吐露されているのは、飢餓のような生命への思いだ。生きたい、生きていたい、生きていさえすればよい！　あと 1 時間で命を奪われるとしたら、誰もがそう思うに違いない。

実は、ドストエフスキー自身、この思いを身をもって体験したのであった。彼は若い頃、当時禁制の社会主義結社に属したかどで逮捕され、死刑を宣告された。彼は銃殺刑を受けるために、処刑場に連行される。いよいよ銃殺されるというその直前、皇帝から特赦の知らせが飛び込んだ。彼はその場で減刑される。そしてシベリアに流刑され、4 年間、極寒の地で懲役に服した。この一連の特赦はすべて皇帝が自らの慈悲を演出するためにしくんだシナリオだった。だが、それを知らぬ者にとっては、恐怖と戦慄の以外の何物でもなかっただろう。

どんなに過酷な生存であっても、生きていることだけが持つ絶対性がある。私は、コロナ禍の中、生活苦のために自ら命を絶つ人が増えているというニュースに接するたびに、『罪と罰』のこの箇所を思い出す。生きることが耐え難く苦しい時、ふと我が身を無くしてしまったらと思うかもしれない。死が甘美なものとして浮かぶのは、しばしば人生の敗北感の中からである。だが、それはやはり危険な誘惑である。

もちろん、死刑直前の 1 時間前の思いなど持ち出したとしても、永遠の孤独の中を千年も万年も耐えるなんて、果たして人間にできるのだろうか。職を失い、借金を抱え、暮らしも立たないことだけでも、耐えられないというのに……。このような批判も、もっともなものだ。しかし、人間にはそれができるのである。ただし、そのための条件がある。

それは、我々が生きる希望の根拠をどこに置くのかに掛かっている。苦しみしか約束されていない人生であっても、それをあえて肯定することができるためには、ただ単なるバイオフィリア（生命への愛好）だけでは足りない。そこに求められるのは、この世の生命を含みつつ、さらにこれを超えた生命への愛好、すなわち永遠のバイオフィリアである。この永遠のバイオフィリアの内に生きる希望を根付かせなければ、とうてい人生の苦海を渡っていくことはできない。そして、この希望に気付く瞬間があるとすれば、処刑 1 時間前に死刑囚が感じる時がまさにそれであろう。誰もがこのような恐るべき瞬間を持つわけではないが、しかし誰もが想像力によってこれを追体験することができる。ドストエフスキーの小説が息苦しいまでの迫真性を持つのは、そのような追体験を読者に迫るからである。要は、この瞬間に触れた永遠のバイオフィリアをどこまで維持し続けることができるかどうかだ。

世紀を超えるメッセージ

キルケゴールが目指していたのも、実はこの永遠のバイオフィリアであった。世界が崩壊し、夢も希望も打ち砕かれた中にあって、なおかつ自らが立ち得る唯一の根拠、それが永遠の命を説くキリストである。キリストの真理が存在するのは、ただ新約聖書の中にのみ。キリストとの同時性の前には、キリスト教会の 1800 年の歴史は無に等しい。歴史的真理は信仰的真理を証明するものではないからだ。

これが説けるのは桁外れに高いキリスト者だけである。彼はそのようなキリスト者を「使徒」と呼んだ。彼は、アンチクリマクスという著者にこの桁外れに高いキリスト者を仮託し、キリストの真理、永遠の命の真理を説かせた。それが『死に至る病』であり、『キリスト教の修練』であった。

キルケゴールにとって過去の 1800 年の歴史が無に等しかったように、未来の 1800 年も同じように無に等しい。現在は 21 世紀であるが、これがたとえ 30 世紀になっても 210 世紀になっても、彼のメッセージは変わることはない。

逆に言えば、このメッセージさえ掴んで我が物としてさえいれば、千年万年も孤独の嵐が吹きすさぶ断崖の上に立ち続けることができるのである。なぜなら、そこで人は永遠のバイオフィリアを得ているからである。永遠のバイオフィリアは、永遠がこの世の時間と切り結ぶ瞬間の内に現出する。それは、『罪と罰』でラスコーリニコフにより述懐された、まさに処刑前 1 時間の心情において立ち現れた。永遠と触れ合うこの瞬間に、永遠のバイオフィリアは火花のように点火される。この火花をたえず心魂の中で燃やし続けること、これが信仰に生きる道である。

我々の命は、はかないと言えばこれほどはかないものはない。しかし、我々にとってはただ一つ限りの命であり、これほど重いものはない。我々に求められるのは、永遠、不滅性と向き合い、与えられた命を最後の最後まで全うしていくことである。それがこの限りある時間性、歴史の中を生きていく人間一人ひとりの使命なのである。

＊　＊　＊

「キルケゴールで読み説く 21 世紀」は今回で完結しました。あちこち話題が飛んだ非学問的なエッセイにお付き合いいただいたことに感謝申し上げます。キルケゴール自身、学問的な体系ではなく非学問的な断片を重視し、難しい理論ではなく個々のエピソードを愛していました。この連載も、そのような書きぶりにならったものであることを最後に言い添えておきます。

［註］

（1）ドストエフスキー『罪と罰 I』中村白葉訳（『世界文学全集』第 20 巻、研秀出版）、216 頁。